

ダンス指導実践に関わる現職教員の意識

—中学校を対象として—

鳥取大学教育学部 保健体育 佐分利 育 代
島根大学教育学部 保健体育 廣 兼 志 保

Teacher's Consciousness on the Practice of Dance Education

—The Case of the Junior High School—

Ikuyo SABURI*

Shiho HIROKANE**

目 的

男女共修，選択制と，学習指導要領の改訂はダンス教育にも新たな問題を提起した。今後教育現場でダンス教育がどうなっていくのか，生涯教育とどう関わっていくのか，子どもにダンスの何をどの様に体験させるのか，そのために，教員養成は何を指導者の資質として準備すべきなのか，改めて考える時期にきている。

本研究は，中学校でのダンス教育の現状をこれまでなされていなかった全国規模で調査し，現職教員のダンスに対する意識を探ることで，今後のダンス教育のあり方，とりわけ教育現場でのダンス教育を担う教員養成におけるダンス教育のあり方への一資料を得ようとするものである。

なお，本研究は，日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門に属する，全国舞踊研究会会員の共同による，全国規模での現職教員に対する質問紙調査に基づいている。

方 法

1. 対象（有効数） 公立中学校 1,243名
全国学校数の1割強にあたる
2. 調査期間 1991年8月～1992年1月
3. 調査方法 質問紙調査
全国規模で無作為に抽出し，体育教員に調査用紙を郵送，一部は集合調査により回収
4. 調査内容 (1)ダンス全般（経験，好き嫌い，ダンス観）
(2)大学時の履修経験（経験期間，履修内容，印象等）

* Department of Physical Education, Faculty of Education, Tottori University

** Department of Physical Education, Faculty of Education, Shimane University

(3)創作ダンス指導の実態（指導の有無，指導の好き嫌い，効果を上げた指導等）

5. 分析方法

奈良教育大学，筑波大学および鳥取大学の大型計算機 SPSS によって統計処理し，全体の傾向，男女差，その他，意識に影響を与えと思われる要因について比較した。

結果

1. 回答者の属性

本調査の回答者の属性は表1のようであった。

表1 回答者の属性

単位=人 (%)

地域	関東435(34.6) 近畿 61(4.8)	四国335(26.6) 九州 60(4.8)	中部225(17.9) 北海道 22(1.7)	中国121(9.6) 東北 0
性別	男性537(43.2)		女性706(56.8)	
年齢	20代387(30.7) 男 158(28.9) 女 229(32.5)	30代518(41.1) 271(49.5) 247(35.1)	40代243(19.3) 88(16.1) 155(22.0)	50代105(8.3) 30(5.5) 73(10.4)
教職年数	0～4年265(21.0) 男 95(17.4) 女 170(24.0)	5～9年301(23.9) 166(30.3) 135(19.1)	10～14年271(21.5) 142(26.0) 129(18.2)	15～19年160(12.7) 69(12.6) 91(12.9)
	20～24年130(10.3) 男 41(7.5) 女 89(12.6)	25～29年 45(3.6) 13(2.4)	30年以上 84(6.7) 21(3.8) 61(8.6)	
専攻教科	保健体育1171(93.0) 理科 5(0.4)	国語 9(0.7) 技術・家庭 9(0.7)	数学 13(1.0) 音楽・美術 11(0.9)	社会 11(0.9) その他 10(0.8)
専門実技	ダンス 75(6.0) 球技 560(44.5) レジャースポーツ 4(0.3)	体操 44(3.5) 武道 66(5.2)	器械体操 88(7.0) 水泳・スキー46(3.7) その他 50(4.0)	陸上210(16.7) 専門無し 22(1.7)

教職経験年数では，年数が高いほどダンス専門の教員の割合が多く，特に30年以上では25.8%がダンス専門。

2. ダンス全般に対する意識

(1) ダンスの好き嫌い

ダンスそのものに対する好嫌を，ダンスの「観る」「踊る」「創る」の活動に対して尋ねた。その結果，50.5%が「観ることは好き」，48.1%が「踊ることは好き」としているのに対して，「創ることは好き」としたのは16.0%だった。「どれも嫌い」としている人は4.1%と少なく，「どちらとも言えない」とした人は，19.2%だった。

創ることに対する抵抗感がうかがえるが，ダンスそのものに対する抵抗はうかがえない。

男女別では女性は「観る」ことよりも「踊る」ことを好きとしている人が多く、男性は「創る」ことだけでなく「踊る」ことに対する抵抗も大きい。しかし、「どれも嫌い」とする人は男女共に少なく、男性では今後好きに変わり得る「どちらとも言えない」とする人が多かった。(図1)

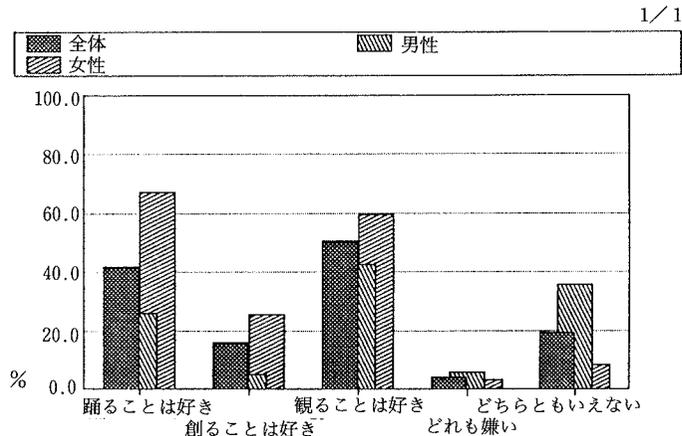


図1 ダンスの好き嫌い

(2) ダンスの指導観

色々な種類のダンスについて、①踊れるか、②指導しているか、③自信を持って指導できるか、④児童や生徒にさせたいかを尋ねた。

①踊れる

フォークダンスを「踊れる」とした人がずば抜けて多く(82.5%)、次いで創作ダンス42.6%、エアロビックダンス24.5%だった。

フォークダンスは女性の88.6%、男性でも74.8%が「踊れる」としており、これは創作ダンスを「踊れる」とした女性が65.1%、男性が13.6%の結果とは大きな差があった。

②指導している

フォークダンス(59.4%)と創作ダンス(57.6%)が多く、次はエアロビックダンス(10.8%)だった。

フォークダンスは男性でも49.5%が指導していた。女性では、フォークダンスを指導している人(67.2%)より、創作ダンスを指導している人(80.0%)の方が多かった。

男性で創作ダンスを指導している人は29.0%でしかなく、創作ダンスの男女差は、「踊れる」「指導している」とも、フォークダンスの男女差よりも大きいという特徴があった。

③自信を持って指導できる

一位がフォークダンス(32.6%)、次に創作ダンス(16.0%)だった。三位に上がっていたのがエアロビックダンス(3.9%)で、全体に自信のない結果だった。

④児童や生徒にさせたい

創作ダンス(64.2%)、フォークダンス(48.7%)、エアロビックダンス(36.2%)だった。

①「踊れる」から④「児童や生徒にさせたい」を図2のように、フォークダンスとエアロビックダンス、創作ダンスで比較すると、創作ダンス指導の特徴が見える。すなわちフォークダンスや、エアロビックダンスで、「踊れる」とした人の割合が「指導している」人より高く、創作ダンスでは

その割合が逆転し、「踊れる」とした人より「指導している」人の割合が高いことである。創作ダンスでは、自分は踊れないし、自信もないと思いつつ指導している教員や、「生徒にさせたい」と思っている教員が多いことがうかがえる。

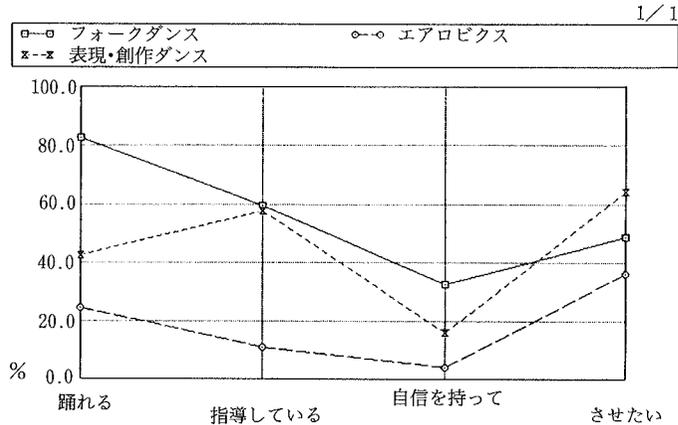


図2 踊れる一させたい

表2-1.2はフォークダンスと創作ダンスについて教職経験年数別に、「指導している」「自信を持って指導できる」と答えた人数とその割合をみたものである。教職経験年数が多いほど指導している教員が多く、またその経験の中で指導に対する自信も深めている様子が見られる。

表2-1 フォークダンスを「指導している」「自身を持って指導できる」教員・教職経験年数

単位=人 (%)

教職経験年数	0-4年	5-9年	10-14年	15-19年	20-24年	25-29年	30年-
指導している	27(47.9)	170(56.5)	169(62.4)	97(60.6)	87(66.9)	34(75.6)	62(73.8)
自信を持って	61(23.0)	76(25.3)	85(31.4)	54(31.9)	62(47.7)	27(60.0)	47(56.0)

表2-2 創作ダンスを「指導している」自信を持って指導できる」教員・教職経験年数

単位=人 (%)

教職経験年数	0-4年	5-9年	10-14年	15-19年	20-24年	25-29年	30年-
指導している	141(53.2)	157(52.2)	157(67.2)	86(53.8)	96(73.8)	30(66.7)	57(67.9)
自信を持って	31(11.7)	27(9.0)	25(9.2)	26(16.3)	41(36.9)	14(31.1)	36(42.9)

⑤まとめ

以上のように男女教員ともに踊れる人が指導しているフォークダンスに比べ、おもに女性教員が担って、踊れない人も自信がないながらも指導しようとしている創作ダンスの側面が明らかになった。

(3) ダンスの教材観

①ダンスの経験、内容は児童・生徒にとって大切だと思いますか

1173人(93.2%)が大切だと回答した。いいえの回答は68人(5.4%)だった。

②ダンスの経験や内容が児童・生徒にとって大切な理由

表3のように感情, 創造性, 表現, リズムといった, ダンスの特性に関わる内容を選択していた。(単数回答)

表3 ダンスの経験・内容が生徒にとって大切と考える理由

		単位=人 (%)	
感情を豊かにする	189(20.6)	リズムによって体力づくりができる	135(14.7)
律動感を養う	43(4.7)	表現・伝達の喜びが体験できる	160(17.4)
身体を知覚できる	45(4.9)	日本や外国の文化・伝統の理解が深まる	11(1.2)
仲間との共感の時間が持てる	87(9.5)	想像性・創造性豊かな人間を育てる	181(19.7)
美しいものへの関心が高まる	7(0.8)	開放的で自由な時間を持てる	36(3.9)
競争的活動でない	18(2.0)	その他	7(0.8)

③ダンスを体育の中で重視しているか

「他領域と変わらない」が最も多く62.3%で, 「重視している」が20.6%, 「重視していない」が17.1%だった。

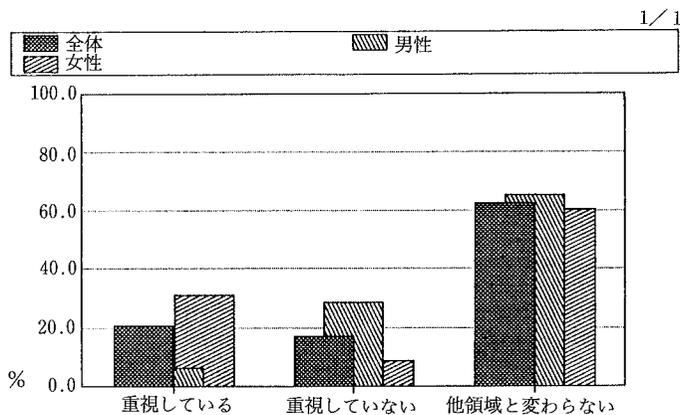


図3 ダンスを体育の中で重視していますか

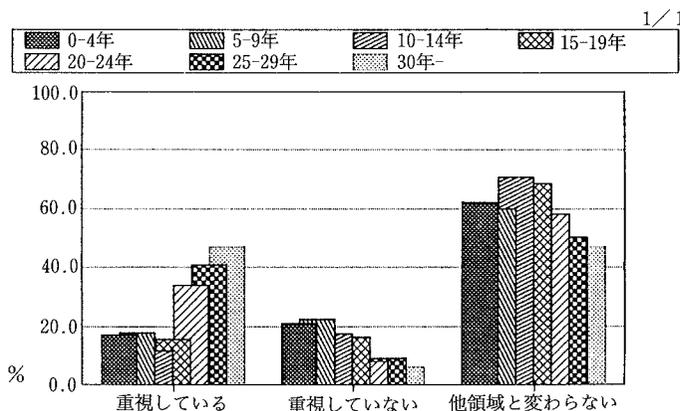


図4 ダンスを体育の中で重視しているか・教職経験別

「重視している」と「していない」の割合は、男性と女性では、図3のように全く逆の様相を見せていた。つまり、男性で「重視していない」割合の方が高く、女性で「重視している人」の割合の方が高かった。

教職経験年数によっても図4のように、教職経験の長いほど、「重視している」人が多い。

④重視していない理由

重視していないと答えた人の61.3%が「自分に体験がない」を選択していた。2位は「周りにやる人がいない」で6.9%だった。(単数回答)(表4)

表4 ダンスを体育の中で重視していない理由

		単位=人 (%)	
自分に体験がない	125(61.3)	学校が否定的	6(3.0)
体力づくりにならない	4(2.0)	周りにやる人がいない	14(6.9)
女子がやるもの	13(6.4)	その他	24(11.8)
他種目に比べ価値がない	11(5.4)		

⑤まとめ

感情、創造性、表現、リズムといった、ダンスの特性に価値を見だし、ダンスの経験、内容は児童・生徒にとって大切だする人が多くいたが、教材としては、他の教材に比べ特別重視しているということはない。男性で、重視していない人が3割近くあったが、重視していない理由として「自分に体験がない」をあげている人が6割あった。

3. 創作ダンスの大学時の履修経験

(1) 創作ダンスの大学時の履修経験

①創作ダンスの大学時の履修期間

図5のように、一年以上の履修者が52.1%、全くないが24.5%だった。

男性と女性では、女性の81.6%が一年以上履修していたのに対して、男性では、全くないが最も多く49.3%、一年未満が37.2%、一年以上履修した人は13.4%しかいなかった。

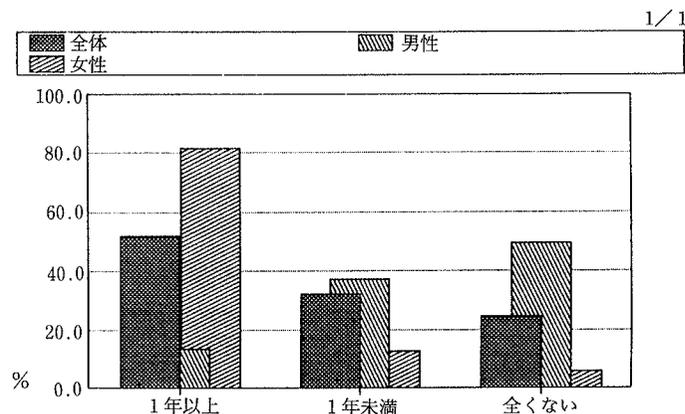


図5 大学時の創作ダンスの履修経験

②大学での履修が男女共習だったか

287人(30.2%)が共習だったとしている。男性で198人(69.0%)、女性で87人(13.1%)と、共習の割合は男性で高かった。男女共習でのダンス学習指導のイメージはむしろ男性の方が持ち易いのではないかと考えられる。

③大学での履修内容

図6のように、「本人の実技能力を高める」が最も多く86.4%、「児童・生徒の題材を体験」38.5%、「舞踊教育の理念や理論」34.5%であった。(複数回答)

男女別の特徴としては、女性で「舞踊教育の理念や理論」41.9%と、男性の16.5%を大きく上回っていた。履修一年以上の女性が多いことから、一年以上の履修の中で、理論的なことを学ぶ余裕が出てくるものと考えられる。図7は、履修内容を履修経験別に見たものである。一年以上の経験者と、一年未満の経験者では、女性と男性の履修内容の差とよく似た結果だった。

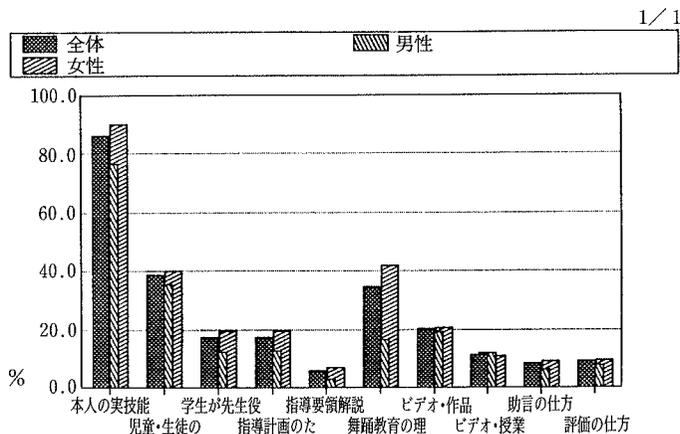


図6 大学での履修内容

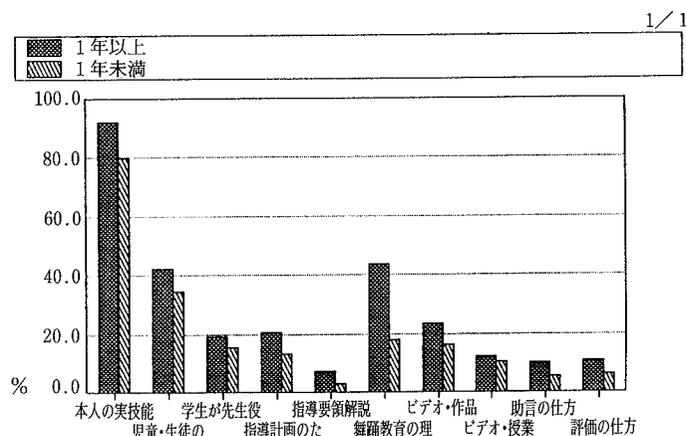


図7 大学での履修内容・履修経験別

④実技内容

図8のようであった。動き、表現の基礎から、作品づくり、発表へと学習されていることがわか

る。しかし、お話づくり、伴奏音楽の選び方、題材の見つけ方といった、いわば指導の基礎となる内容に関しての不足がみられる。(複数回答)

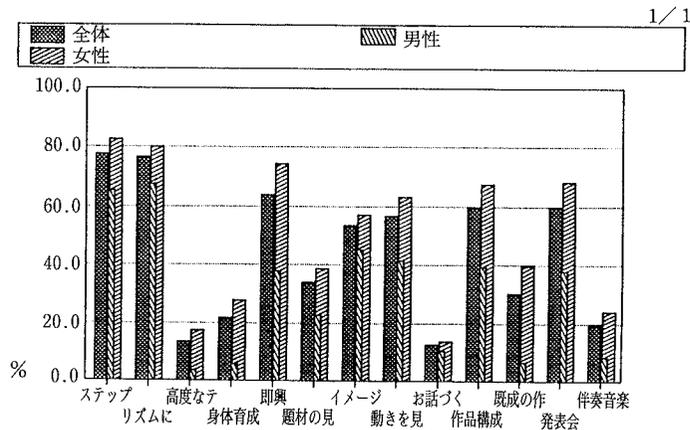


図8 実技内容

⑤まとめ

大学時の履修経験は、履修の期間、内容に男女の差が大きく、男性の5割が未履修であり、履修している人も一年未満が多い。履修内容も、男性では特に動きづくりに関する実技に片寄っていた。ただ、女性の履修経験のほとんどが女性だけのクラスでのものだったのに比べ、男性の履修の多くが男女共習であり、男女共習でのダンス学習指導のイメージはむしろ男性の方が持ち易いのではないかと考えられる。

(2) 履修後の印象

①履修後ダンスに対する意識が変わったか

63.4%が「プラスに変化した」としており、履修経験は、ダンスに対する意識をプラスに変えていた。(図9)

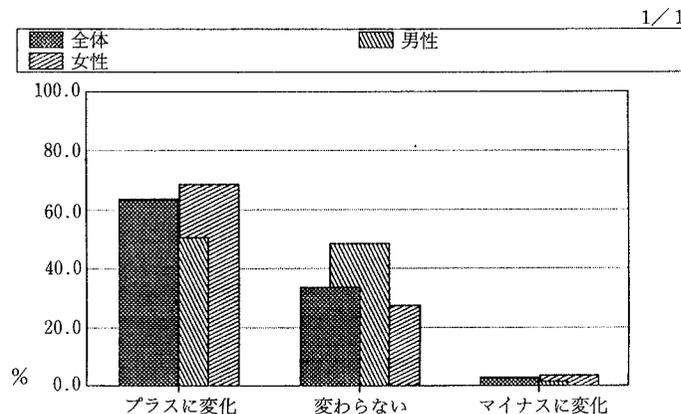


図9 履修後の意識の変化

女性で「プラスに変化した人」が多かったのに比べ、男性で「プラスに変化した」と「変わらない」はほぼ同じ割合であったが、男女の履修期間の差によるところが大きいと思われる。

②履修後どんな印象が残ったか

図10のうち、「自分を外（に表現できるすばらしさ）」から「仲間の知（らなかつた面を発見）」までが好印象、「表現する（のは恥ずかしい）」から「中途半端（な動きは見ていて気持ち悪い）」までが悪い印象である。

他の項目に比べ多かったのは「創作する難しさ」と「作品を創り上げた満足感・達成感」で、この二つは、創作ダンスの両極面といえる。（単数回答）

大学時の履修内容のうち「作品づくり」あるいはそれに関わる実技の経験がこれらの意識に大きく関わっていると推察できる。

男女による印象の差はその多くが大学時の履修期間、履修内容などの経験の差によると考えられる。女性では「作品を創り上げた満足感・達成感」（14.9%）を始めとした好印象が合わせて36.7%であったのに対し、男性では「創作する難しさ」（18.8%）、「表現するのは恥ずかしい・人目が気になる」（9.2%）等の悪い印象が多く残っていた（39.5%）。

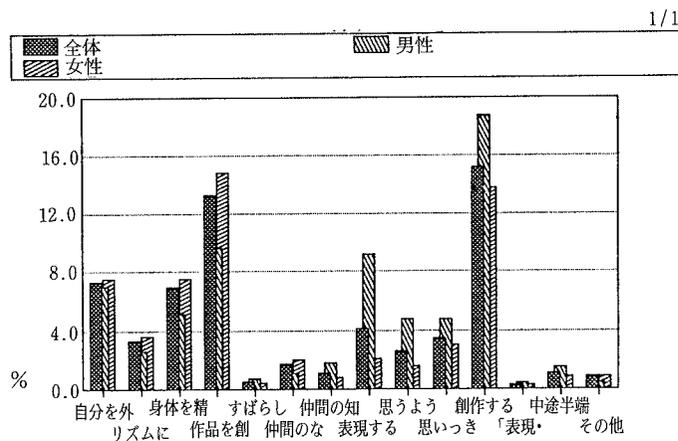


図10 履修後の印象

③どのようなことが実際に身についたか

複数回答で図11のように、「リズムによって踊れる」が最も多く（40.8%）、続いて「自分を表現できる」（29.0%）、「自由に様々な動きができる」（28.4%）、「創造性や想像性が豊かになった」（26.0%）と、踊る楽しさ、自己表現、自由、創造が創作ダンス履修の特性として選ばれていた。続いて、「他の人とコミュニケーションが持てる」（25.0%）であった。

男女別にもみるとその選択の順序が異なっていた。男性の、1位「リズムによって踊れる」（76人、履修経験者272人の27.9%）、2位「他の人とコミュニケーションが持てる」（73人、26.8%）、3位「自分を表現できる」（63人、23.2%）に対し、女性は1位「リズムによって踊れる」（666人中306人、45.9%）、2位「自由に様々な動きができる」（222人、33.3%）、3位「自分を表現できる」（209人、31.4%）だった。また、「柔らかく美しい動きができる」「美意識や感動する心が育った」は女性の20%以上にあげられているのに対し、男性では、3.3%、7.7%と低い選択率だった。リズムの特性の他に男性では、グループ活動としての特性を、女性では自己実現としての特性をより強く印象として持ったようである。

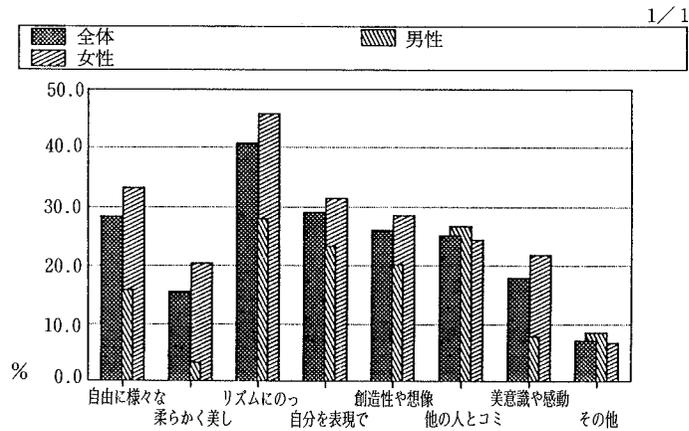


図11 履修で身についたこと

④まとめ

以上のように、履修によって、ダンスへの意識はプラスに変化するが、履修後には、「創作する難しさ」と「作品を創り上げた満足感・達成感」という両極の印象が残っていることが分かった。特に、履修期間の少ない男性では、履修後のダンスに対する意識が変わらないとする人が多く、悪い印象が多く残っていた。履修によって身についたと思うものにも男女に差があり、男性ではグループ活動としての特性を、女性では自己実現としての特性を上げていた。女性のように、満足感や、達成観、自己実現を味わうには、男性の履修期間や内容では不十分に思われる。

(3) 指導に役立っているか

①履修経験は指導時に役立っているか

74.5%が役に立っている、23.7%が立っていないとしている。(図12)

男性と女性では、女性の81.4%が役立ったとしているのに対し、男性では、役立ったとしているのは57.4%で、役立っていないと感じている人が41.2%もいた。

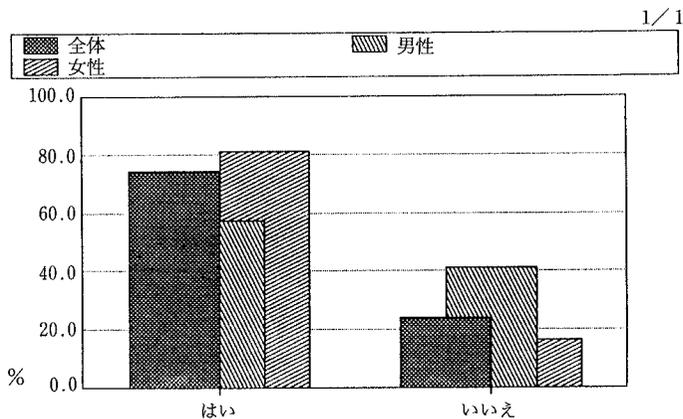


図12 履修経験は役立っているか

②指導に役立った履修経験

授業内容として、「本人の実技能力を高める」を上げている人が最も多く(56.0%)、実技内容としては「リズムによって動く」51.5%、「ステップ等の基本的な動き」49.7%が多かった。(いずれも複数回答)(表5, 6)

しかしこれらを履修した経験に対してどれだけの人が役に立ったとしているかの観点でみると、図13のように、結果は大きく変わってくる。すなわち、「助言の仕方」では、経験した履修内容として上げた人数以上の人が役に立った履修経験として上げ(77人对105人)、次いで「指導計画の立て方」「評価の仕方」等指導にむすびつく内容が役に立ったとする人がそれぞれ、86.0%、81.0%と多く、このような内容が望まれていることが想像される。

表5 役に立った履修経験(授業内容)

		単位=人(%)	
本人の実技能力を高める	325(56.0)	ビデオ観賞(作品観賞)	55(9.7)
児童・生徒の題材を体験	175(30.5)	ビデオ観賞(授業実践)	40(7.1)
学生が先生役になって指導	41(7.2)	助言の仕方	105(18.4)
指導計画のたて方	141(24.8)	評価の仕方	68(11.9)
指導要領解説	16(1.3)	その他	12(2.1)
無踊教育の理念や理論	65(11.5)		

表6 役に立った履修内容(実技内容)

		単位=人(%)	
ステップ等の基本的な動き	295(49.7)	動きを見つける	246(41.4)
リズムによって動く	304(51.5)	お話づくり	49(8.4)
高度なテクニック	18(3.1)	作品構成	209(35.4)
身体育成法	40(6.5)	既成の作品	37(6.3)
即興	173(29.4)	発表会	121(20.5)
題材の見つけ方	177(30.2)	伴奏音楽の選び方	61(10.4)
イメージを広げる	235(39.6)	その他	8(1.0)

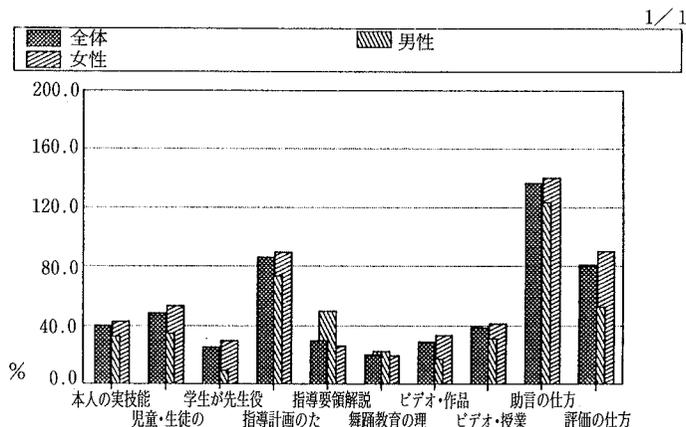


図13 役に立った授業内容・受講経験に対して

③まとめ

女性の8割, 男性の6割が, 履修経験は指導に役立ったとしていた。役立った内容は, 「リズムにのって動く」「ステップ等の基本的な動き」等実技内容だったが, 履修した内容との関係でみたとき, 役立ったとされた割合が高かったのは, 「指導計画の立て方」「評価の仕方」で, 指導と結び付く内容だった。

4. 創作ダンスの指導の現状と教員の指導観

(1) 指導実践

①ここ一年間の指導実践の有無

58.6%が実践したと回答していた。

男性で40.0%, 女性で76.1%の実施率だった。

また, 年間の授業時間は, 12~10時間が40.4%と最も多く, 次いで, 9~7時間が24.1%だった。

(2) 創作ダンス指導の好き嫌い

①創作ダンスの指導が好きですか

「指導が好き」と答えた人17.9%, 「段々好きになる」19.2%, 「段々嫌いになる」8.8%, 「嫌い」14.8%だった。無回答39.3%は指導していないための無回答と考えられる。

ここ一年間に授業を実施した人だけを取り上げると, 「好き」と「段々好きになる」を合わせて65.0%あった。ここ一年間に実施していない人でこの質問に答えた人をみると, 実施した人とは反対に「嫌い」と「段々嫌いになる」で79.4%を占めた。(表7)

指導実践の有無と教員の指導の好き嫌いが大きく関わりあっている。

男性では, 「嫌い」が最も多く, 「好き」が最も少ないが, 「段々好きになる」は2位であった。実践を重ねることで「好き」が増える可能性があると考えられる。(表8)

表7 ここ1年間の指導実践の有無による創作ダンス指導の好き嫌い

	単位=人 (%)			
	好き	段々好きになる	段々嫌いになる	嫌い
実践した	218(31.7)	229(33.3)	92(13.4)	148(21.5)
実践しなかった	3(4.4)	11(16.2)	18(26.5)	36(52.9)
	有意水準 0.1%			

表8 男女による創作ダンス指導の好き嫌い

	単位=人 (%)			
	好き	段々好きになる	段々嫌いになる	嫌い
男性	27(11.1)	84(34.4)	36(14.8)	97(39.8)
女性	197(38.0)	158(30.5)	74(14.3)	89(17.2)
	有意水準 0.1%			

②好きな理由やきっかけ

創作ダンスの指導が好きだと答えた指導者に尋ねた結果が表9である。(単数回答)

上位に上がっている「子どもの生き生きした表現に触れ、素晴らしさを味わえる」は、指導経験から、「ダンス経験から楽しさや素晴らしさを知っている」は大学での履修経験や、講習会での経験から得られるもので、いずれも教員自らの直接体験が指導の動機になっていることを示している。過去のダンス体験でどんな印象を受けたかが大きく影響することが想像できる。

男性では、授業参観の経験も指導のきっかけになっている。

表9 指導が好きな理由やきっかけ

	単位=人 (%)		
	全体	男性	女性
授業を参観し感動したことがある	30(7.0)	15(12.6)	15(4.9)
ダンスの経験から楽しさや素晴らしさを知っている	107(25.0)	13(10.9)	94(30.5)
子供の生き生きした表現に触れ素晴らしさを味わえる	226(52.8)	70(58.8)	156(50.6)
学校のカリキュラムにある	28(6.5)	8(6.7)	20(6.5)
学校の取り組みがいい	3(0.7)	2(1.7)	1(0.3)
自分が楽しい	24(5.6)	6(5.0)	17(5.5)
人に勧められた	2(0.5)	1(0.8)	1(0.3)
その他	8(1.9)	4(3.4)	4(1.3)
		有意水準 0.1%	

③まとめ

以上のように、指導を実践した教員や自分自身ダンスの体験がある教員ほど、創作ダンスの指導が好きで、指導の好き嫌いがまた次の指導への動機づけになっていた。

(3) 指導実践上の問題

①創作ダンスの指導に取り組む時に一番障害になることは何か

「生徒が動かない」「自分が動いてみせられない」が上位にあげられていた。

男性では、「自分が動いてみせられない」が最も多く(25.2%)、次いで、「生徒が動かない」(18.2%)、「自分自身あまり好きでない」(9.3%)、女性は「生徒が動かない」(27.1%)、「生徒の能力に差がある」(13.7%)、「自分が動いてみせられない」(9.5%)が上位だった。男性では、大学時の履修経験の少ない人が多いことから、「自分が動いてみせられない」等教員の側の問題が授業の障害の多くと考えられていると受け取れる。

表10 履修経験の違いによる創作ダンス指導の障害(上位3位)

履修経験	単位=人 (%)		
	1位	2位	3位
一年以上	生徒が動かない 96(26.6)	生徒の能力に差がある 53(14.7)	自分で動いてみせられない 29(8.0)
一年未満	生徒が動かない 32(24.1)	自分で動いてみせられない 23(17.3)	自分自身あまり好きでない 16(12.0)
未履修	自分で動いてみせられない 41(32.3)	生徒が動かない 21(16.5)	よい指導資料がない 11(8.7)

履修経験別に授業の障害をどう捉えているかを、履修経験群別に1位から3位まで取り上げてみると表10のようである。履修経験が多いほど生徒の側に障害があるとしている。注目したいのは、履修経験一年未満で、「自分自身あまり好きでない」が3番目の障害として上がっていることである。

表11は、創作ダンスの指導が好きか嫌いかによって指導の障害をどうとらえているかを、上位3位ずつ取り上げて比較したものである。指導の好きな教員は、指導の障害として生徒と指導環境としての教員構成を上げ、指導の嫌いな教員になるほど生徒側の問題を障害と考える人が減り、自分自身の問題を指導の障害と捉えている。

表11 創作ダンス指導の好嫌による創作ダンス指導の障害（上位3位）

		単位=人 (%)		
	1位	2位	3位	
好き	生徒が動かない 48(27.0)	生徒の能力に差がある 24(13.5)	男女教員構成のアンバランス 16(9.0)	
段々好き	生徒が動かない 52(27.2)	自分で動いてみせられない 33(17.3)	生徒の能力に差がある 29(15.2)	
段々嫌い	生徒が動かない 19(25.7)	自分で動いてみせられない 15(20.3)	自分自身あまり好きでない 11(14.9)	
嫌い	自分自身あまり好きでない 32(22.7)	自分で動いてみせられない 31(22.0)	生徒が動かない 25(17.7)	

②指導について今後身につけたいことがあるか

51.2%がある、11.6%がないと答えた。

身につけたいことの内容としては、自分自身の実技能力、助言の仕方、指導計画の立て方が多く

表12 授業計画を組むときの参考

	単位=人 (%)			
	全体	男性	女性	
創り踊り観た大学時履修経験	242(47.0)	25(27.8)	217(51.1)	***
指導に関する大学時履修経験	99(19.2)	11(12.2)	88(20.7)	*
身近にいる先輩同僚友人等の指導	152(29.5)	36(40.0)	116(27.3)	*
講習会での創り踊り観る経験	215(41.7)	15(16.7)	200(47.1)	***
講習会での指導実践の講義や指導案	176(34.2)	16(17.8)	160(37.6)	***
優れた公開授業・実践報告資料	123(23.9)	18(20.0)	105(24.7)	
具体的な学習指導のビデオ・フィルム	96(18.6)	25(27.8)	71(16.7)	
学習指導実践指導専門書	72(14.0)	11(12.2)	61(14.4)	
実技の教科書、副読本	136(26.4)	27(30.0)	109(25.6)	
文部省の指導書	36(7.0)	4(4.5)	32(7.5)	
レッスン所の体験	53(10.3)	6(6.7)	47(11.1)	
自主的研究会	59(11.5)	1(1.1)	58(13.6)	***
他の芸術分野への理解	21(4.1)	0	21(4.9)	*
その他	17(3.3)	5(5.6)	12(2.8)	

有意水準 ***=0.1% * = 5%

選ばれていた。

③「表現・創作」の授業内容や授業課程を構想し、自分で授業計画を組むことができるか
515人(40.9%)ができると答えている。男女では、90人(16.0%)と425人(60.0%)と大きな差があった。

④授業計画を組むときに参考にしているもの

自分で授業計画を組むことが「できる」と答えた人に尋ねた結果多かったのは、「創り踊り観た大学時履修経験」や「講習会での経験」であった。男性教員では、「身近にいる先輩同僚友人等の指導」を参考にしている人が最も多かった。(36人, 40%) (表12)

⑤指導計画を組むのに身近にどんなものがあったら役に立つか

回答率が47.6%と低かったが、その中で「具体的な学習指導のビデオ・フィルム」をあげた人が最も多く45.9%、次に、「講習会での指導実践の講義や指導案」「講習会での創り踊り観る経験」を合わせて講習会を望んでいるものが17.9%、「優れた公開授業・実践報告資料」14.0%と、指導現場と直接結びつく資料や、直接体験が望まれていた。

⑥ダンス講習会は、他種目に比べ、多く開催されているか

過去一年間に参加した講習会では、女性で49.6%がダンスの講習会へ1回以上参加していたが、男性では10.1%だった。スポーツ種目の講習では男性の61.5%、女性の44.6%が1回以上参加していた。体操では、男性18.6%、女性19.6%だった。スポーツ種目を除いて、男性の講習会参加は少なく、ダンスに関する自らの経験は増えていないことがわかる。

講習会の開催については表13のように、「少ない」と「わからない」合わせて男性の8割、女性の6割がその情報を得ていない、あるいは満足いく講習の機会を得ていないことがわかる。

表13 ダンスの講習会は他種目に比べ多く開催されていますか
単位=人 (%)

	男性	女性
多い	21(3.9)	95(13.6)
同じ位	79(14.7)	186(26.7)
少ない	124(23.0)	169(24.3)
わからない	314(58.4)	246(35.3)

有意水準 0.1%

⑦生徒は「表現・創作」に興味を持って取り組みましたか

565人が「取り組んだ」、166人が「取り組まない」と回答した。これらは回答者全体からみると、44.9%と、13.2%であるが、ここ一年間に授業を実践したと答えた738人が回答したと考えるとそれぞれ76.6%と22.5%に当たる。実践した4人に3人までが生徒は興味を持って取り組んだと見ている。

⑧まとめ

創作ダンス指導実践上の問題をまとめると以下のようであった。

指導の障害として、「生徒が動かない」「自分が動いてみせられない」等、生徒の側と指導者の側の問題が上位にあげられていた。女性、大学時の履修経験が1年以上の教員、指導が好きと思っている教員ほど生徒の側に、男性、履修経験のない人、指導が嫌いな人ほど指導者の側に障害があるのとらえていた。

指導者として、自分自身の実技能力、助言の仕方、指導計画の立て方について今後もっと身につけたいとしている。

女性に比べ、創作ダンスの指導計画を自分で立てることができるとする男性教員は少なく、また立てられる人も「身近にいる先輩同僚友人等の指導」によることが多い。女性では、大学での履修経験や講習会での経験を参考に指導計画を立てるとする人が多く、大学での履修経験がまず必要なことがここでも浮き彫りになった。

指導資料としては、具体的な学習指導のビデオ・フィルムが望まれていた。講習会での直接体験は履修経験の少なさをカバーするものとして必要と思われるし、望まれてもいるが、その機会は少なく、また情報も教員に届いていない。

実践された授業では、生徒は興味を持って取り組んだと教員の4人に3人までが感じていた。

(4) 効果をあげた指導

生徒が創作ダンスに楽しんで取り組んだときの、効果をあげた指導のポイントを尋ねた。

①導入時

「教師と一緒に動く」「のりやすい音楽を使用する」が多かった。

②展開時

「班にあうアドバイスができるようにする」「動きの広がり进行を教える」「色々な題材を与え創作力をつける」と、幅広い経験と知識の必要な内容になっていた。

③まとめの段階

「発表会を行う」「完成の喜びを味わわせる」「ビデオ撮影」という、達成観を味わわせる指導が行われていた。

④全般にわたる指導

「教師の表情、態度、アドバイスを工夫」「教師が自ら体を動かすようにする」の指導者自身の表現・創作への積極的な姿勢と、「話し合いができる状態をつくる」という学習者の積極的なグループ活動への環境づくりがあげられていた。

⑤まとめ

生徒が楽しんで創作ダンスに取り組むために、指導者は自ら動き、表現を楽しみ、生徒をのせ、生徒たちが表現しようとする様々なイメージに共感し、表現技能へのアドバイスを工夫し、積極的なグループ活動のための環境づくりに気を配って、表現できた達成観を味わわせるための機会を計画していた。

これら効果をあげた授業のポイントからは、まずは創作ダンスの経験、そして創作ダンスが好きで必要なこと、さらに学習を深める段階で適切なアドバイスができる理論的なものが指導者側の資質として必要なことが、改めて浮き彫りにされた。前項の指導上の問題で、大学時の履修経験の少ない人ほど「自分で動いてみせられない」「自分自身あまり好きでない」を指導の障害ととらえている人が多く、また、履修経験が1年以上ある人の多い女性で理論的なものが履修内容に含まれていたことから、教員養成での履修経験1年は現場での効果的な授業のために必要な期間といえる。

5. 大学での履修経験の違いによる「創作ダンス」に対する意識

これまでの結果を通して大学時の履修経験は中学校現職教員の創作ダンスに対する意識や指導観を左右していること、特に、履修の期間一年を境に大きな差があることが見えてきた。男女差も、

履修経験の差によるものと考えられる。

本項では、改めて、履修経験を取り上げ、創作ダンスに対する意識や指導観の違いを考察したい。

(1) ダンス観の違い

①ダンスは好きか

「踊ることは好き」と、「創ることは好き」そして「どちらとも言えない」で有意な差が、見られる(表14)。一年未満の履修経験者は、一年以上の履修経験者より履修経験が全くない人の意識に近い。

表14 履修経験の違いによるダンスの好き嫌い

	踊ることは好き	創ることは好き	観ることは好き	どれも嫌い	どちらとも言えない
一年以上	411(64.4)	167(26.5)	375(58.8)	23(3.7)	61(9.7)
一年未満	109(39.4)	21(7.7)	128(46.5)	12(4.5)	78(28.7)
未履修	85(28.9)	12(4.1)	125(42.2)	17(5.9)	99(33.8)
有意差	***	***	***		*** 0.1%

単位=人 (%)

②履修後のダンスに対する意識が変わったか

一年以上の履修経験はダンスに対する興味、関心、価値観をプラスに変化させるが、一年未満の履修では半数の人が履修前と変化していない(図14)。

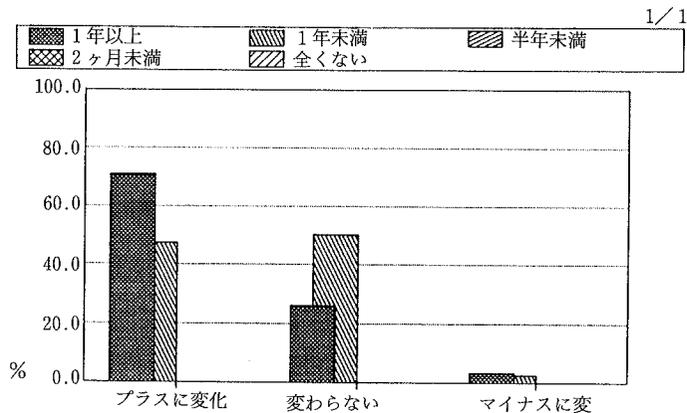


図14 意識の変化・履修経験

③履修後に残った印象

図15は項目名が全部出ていないが、左から7番「仲間の知(仲間の知らなかった面を発見)」までがプラスの印象、8番目「表現する(表現するのは恥ずかしい、人目が気になる)」からの7項目がマイナスの印象に分けられる。

履修一年以上では、「創作する難しさ」も多くあげられているが、「作品を創り上げた満足感、達成感」がそれ以上にあげられ、全体にプラスの印象が多く残っている。難しさを克服し、達成感を味わっていることが想像できる。一年未満では「創作する難しさ」が突出し、難しい、恥ずかしいなど、マイナスの印象が多く残っている。

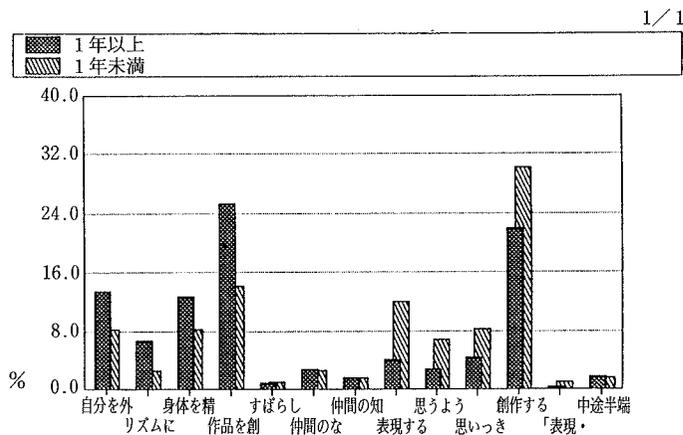


図15 履修後の印象・履習経験

④まとめ

一年以上の履修経験は、プラスの印象を多く残し、ダンスに対する興味、関心、価値観をプラスに変化させるが、一年未満ではマイナスの印象を多く残してしまっている。そして、ダンスの好き嫌いについても全く履修経験のない人に近い意識しか持っていない。

(2) 指導観の違い

①指導が好きな理由

大学時の履修経験や指導経験が多いほど、「創作ダンス」の指導を好きとする人の割合が多い。そして「指導が好きな理由やきっかけ」も、履修経験によって違いがあった(表15)。

理由の第1位は履修期間の異なるどのグループも「子供の生き生きした表現に触れ素晴らしさを味わえる」だったが、履修経験一年以上の人にとって「ダンス経験から楽しさや素晴らしさを知っている」は、もう一つの大きな理由であった。これに対し、一年未満の履修経験の人の6割以上が「子供の生き生きした表現に触れ素晴らしさを味わえる」と、指導経験から好きになったとしていた。

表15 履修経験の違いによる指導が好きな理由やきっかけ(上位3位)

		単位=人 (%)		
	1位	2位	3位	
一年以上	子供の生き生きした表現に触れ素晴らしさを味わえる 137(49.5)	ダンスの経験から楽しさや素晴らしさを知っている 91(32.9)	自分が楽しい 12(4.3)	
一年未満	子供の生き生きした表現に触れ素晴らしさを味わえる 50(62.5)	ダンスの経験から楽しさや素晴らしさを知っている 14(17.5)	授業を参観し感動したことがある 7(8.8)	
未履修	子供の生き生きした表現に触れ素晴らしさを味わえる 37(54.4)	授業を参観し感動したことがある 11(16.2)	学校のカリキュラムにある 8(11.8)	

②指導者としての資質

女性に比べ、創作ダンスの指導計画を自分で立てることができるとする男性教員は少なく、指導計画を立てる上で参考のできる大学での履修経験の不足が指摘できた。

履修経験の少ない教員自身が自分の指導者としての資質を評価していないこともあげられる。すなわち、創作ダンスの指導に取り組むときの一番の障害として履修経験の少ない人ほど「自分で動いてみせられない」のような教員の側の問題をあげていることである。「自分自身あまり好きでない」ことを指導の障害とした人の割合が履修経験のない人より一年以下の履修経験を持つ人で高いことは重要な課題である(表10)。

③履修経験が指導に役立っているか

一年以下の履修経験者の4割が役立っていないと感じている。一年以上の履修経験者と一年未満の履修経験者では図16のように大きな差があった。

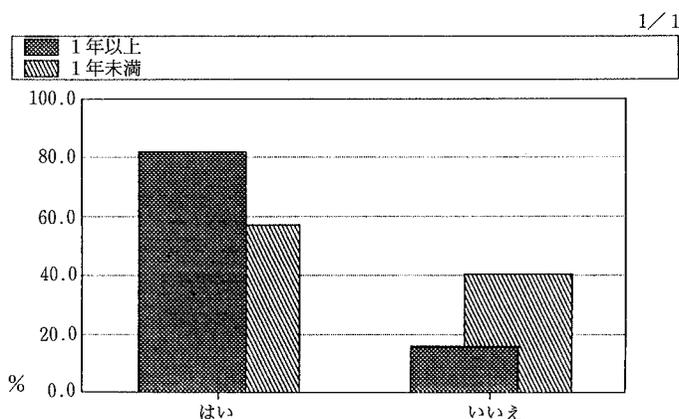


図16 役立っているか・履修経験

④履修内容

一年以上の履修者と一年未満の履修者では、履修内容に図7の様な違いがあった。一年未満の履修者では理論的な内容が少ない。「本人の実技能力を高める」、「舞踊教育の理念や理論」で1%水準での、「指導計画のたて方」、「指導要領解説」で5%水準での有意差があった。

⑤まとめ

一年以上の履修経験は、創作ダンスの指導を好きにするきっかけになっている。

一年未満の履修経験者では、自分自身の指導者としての資質に不安を持っており、表現・創作ダンスの指導に取り組みにくい原因となっている。

まとめ

1. ダンス全般に対する意識

「創ること」に対する抵抗、男性では「踊ること」への抵抗もうかがえるが、ダンスそのものを嫌いとする人は少ない。

フォークダンスは、踊れて指導している人が多いが、創作ダンスは主に女性教員が担い、踊れない人も自信がないながらも指導しようとしている。そしてその経験の中で指導に対する自信を深め

ている。

感情、創造性、表現、リズムといった、ダンスの特性に価値を認め、ダンスの経験、内容は生徒にとって大切だとする人が多くいたが、他の教材に比べ特別重視していることはなかった。男性で、重視していないとする人が3割あったが、その理由は「自分に体験がない」だった。

2. 創作ダンスの大学時の履修経験

創作ダンスの大学時の履修経験は、履修の期間、内容に男女の差が大きく、男性の5割が未履修であり、履修している人も一年未満が多い。履修内容も、男子では特に動きづくりに関する実技に片寄っていた。

履修経験はダンスへの意識をプラスに変化させるが、履修期間の少ない男性では履修後、ダンスに対する悪い印象が多く残っていた。女性のように、満足感や、自己実現を味わうには、男性の履修期間や内容では不十分に思われる。

履修経験は指導に役立っているが、役立った内容は主に実技内容だった。「指導計画のたて方」「評価の仕方」等、指導と結び付く内容が望まれている。

3. 「創作ダンス」の指導の現状と教員の指導観

6割の指導者がここ1年間に指導を実践していた。

指導を実践した教員や自分自身ダンスの体験がある教員ほど、指導が好きで、それがまた次の指導への動機づけになっていた。

指導者として、自分自身の実技能力、助言の仕方、指導計画の立て方について今後もっと身につけたいとしている。

身近に欲しい指導資料として、具体的な学習指導のビデオ・フィルムを望んでいる。講習会での直接体験は履修経験の少なさをカバーするものとして必要と思われるし、望まれてもいるが、その機会は少なく、また情報も教員に届いていない。

授業の効果をあげるために、指導者は自ら動き、表現を楽しみ、生徒をのせ、生徒たちが表現しようとする様々なイメージに共感し、表現技能へのアドバイスを工夫し、積極的なグループ活動のための環境づくりに気を配って、達成観を味わわせる機会を計画していた。

大学での履修経験等の経験を参考に指導計画を立てられる女性、指導が好きと思っている教員ほど、指導を実践する上での障害が生徒の側にあると考え、男性、履修経験のない人、指導が嫌いな人ほど指導者の側に障害があるととらえていた。男性は創作ダンスの指導計画を自分で立てる際、「身近にいる先輩同僚友人等の指導」を参考にしていた。

指導実践上の指導者の側の障害としてあげられた「自分で動いてみせられない」は、効果をあげるための導入でのポイントである。大学時の履修経験の重要性が指摘できる。

4. 大学での履修経験の違いによる「創作ダンス」に対する意識

一年以上の履修経験は、プラスの印象を多く残し、ダンスに対する興味、関心、価値観をプラスに変化させるが、一年未満ではマイナスの印象を多く残してしまっている。そして、ダンスの好き嫌いについても全く履修経験のない人に近い意識しか持っていない。

一年以上の履修経験は、創作ダンスの指導を好きにするきっかけになっている。

一年未満の履修経験者では、自分自身の指導者としての資質に不安を持っており、創作ダンスの

指導に取り組みにくい原因となっている。

5. 教員養成におけるダンス教育への指針

教員自身のダンス経験が、その後のダンス観や指導観を左右していた。

中学校での実りあるダンス教育を実現させるには、教員養成課程に於て一年以上の履修期間を保障し、指導法に関する内容を充実させると共に、カリキュラム上の性差を無くすことを考えなければならない。

また現職教員のための講習会の機会の確保、ビデオを含めた情報の提供等アフターケアも教員養成と共に考えなければならないとの示唆も得た。

〈付記〉

本稿は研究プロジェクト「ダンス指導に関わる教員の意識」の一員として中学校を担当し、日本体育学会43回大会(1992年)で発表したものをベースに研究をまとめたものである。調査用紙作成・調査・データー入力・データーチェックは全国舞踊研究会会員並びに協力者に依った。調査にご協力いただいた全国の現職教員の方々に、また、今回の解析に当たってご指導、ご協力をいただいた、鳥取大学情報処理センターの鈴木輝博技官はじめ、教育学部の多くの先生がたに心より感謝したい。

〈参考文献〉

- 1) 佐分利育代・廣兼志保・中村久子：ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——中学校を対象として——，日本体育学会43回大会，1992年
- 2) 松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子・佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子：現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討——大学時履修経験が与える影響について——舞踊学 第16号 舞踊学会 1994年
- 3) 佐分利育代・井上茂子：聾学校におけるダンス指導，鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第33巻 第1号 pp. 65-79 1991年
- 4) 茅野理子・森島明子：栃木県下中学校におけるダンス指導の実態について，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門 第10回全国創作舞踊研究発表会研究紀要，pp.16-19，1990年

(1994年8月31日受理)

